

兵士について

海老田 久一

私は、昭和 12 年に徴兵検査第二補充兵となり、昭和 15 年 8 月 20 日に歩兵として召集されて、札幌第二十五連隊に入隊した。

11 月 20 日、部隊に動員命令が下る。初年兵教育四中隊に勤務した 9 か月、その間幾度か出征兵士を見送った。私は召集解除により、翌年 5 月 30 日に帰宅し、農業に従事する。

* * * * *

昭和 20 年 4 月 1 日、二度目の召集で、旭川第七師団二十八連隊に入る。当時既に中隊には、衛兵の使用する銃しか見当たらなかった。動員の度毎に、持たせられる兵器も無くなり、敗戦の気配が強く印象づけられた。

6 月中旬、妹背牛の水田農家に援農に行って、除草機を押した。7 月は動員の連続であった。

残る隊員は、弾薬疎開*1 のため、塹壕*2 掘りに愛別の山間部に 1 週間くらい行った。弾薬庫より 3 分の 1 程残して全部トラックで運び、丸太を並べて積み重ね、トタン板をかぶせて土で埋め込む作業をした。

忘れることのできない日、7 月 15 日朝 6 時ころより旭川市内に空襲あり、我等の兵舎にグラマン戦闘機 5 機が来襲。2 時間余り機銃掃射を受けた。布団に弾がめり込む。別の中隊では戦闘機に銃撃され、2 名が即死する。また偽装戦車等は銃撃されて無残な姿であった。午前 9 時ころには空襲が終わり、ほっとしたのも束の間に、再度の空襲、軽爆撃機にて国策パルプ旭川工場に 2 発の爆弾を投下。2 キロ離れた連隊より見た。爆弾投下の瞬間、機体よりピカーッと稲妻のような光が発し、火柱が立つ。10 秒程度で入道雲のような形の真黒の煙がもくもくと立ち昇る。そのすさまじさと爆弾の威力に驚く意外、何ものにも例えようがない。旭川駅周辺とその他数か所、機銃掃射を受けたが、被害は軽微とのことであった。

7 月 25 日に七師団に動員が下り、人員 900 余名は十勝狩勝新得新内にて抵抗線の築城作業に出発した。ここが自分達の戦死の場所と思えば、今まで一生懸命、日夜奮闘努力を続けた作業もむなしく思われた。

* * * * *

次に食事について紹介しよう。私達一般兵の食事は、主食は米 2 割、麦 3 割、コーリャン 5 割で、米の姿はあまり見えなかった。お腹がすいて冷汗が出る程だった。私たち農家出身者は、仕事には耐えられたが、肉体労働の経験のない人は体を悪くし、作業を休む者が続出し、初めは空腹を感じていたが、日がたつにつれて空腹よりも体がだるい。作業帰りに堅い蕎麦を取って来てたべたり、蛇を焼いて食べて空腹をしのいだ。

* * * * *

8 月 15 日朝、隊長殿がラジオを聞き、お昼には天皇陛下の御言葉がありとの通達あり、正

午に新得新内の山の中で終戦の言葉賜わる。隊長は、涙を流しながら敗戦の御言葉と作業取り止めの命令を受け取った。私達兵士は、18日まで作業の機具を片づけ、8月19日に旭川師団に帰った。

8月20日、着のみ着のままで除隊し、故郷美唄に帰ったのであった。

(えびた ひさいち 大正6年生まれ)

***1 弾薬疎開** 空襲に備えて弾薬を安全な場所に移動し、保管すること。疎開に関しては、ほかに大都市から軍需工場を疎開させる「生産疎開」、都市密集地の建物を取り壊して空白地帯をつくり、延焼を防ぎ消火活動を容易にする「建物疎開」、老人や子供などを移動させ、人的被害を最小限にとどめ、都市交通などの混乱を防ぐ「人口疎開」などがあった。

***2 塹壕** 野戦で敵の攻撃から身を隠す防護施設、溝を掘り、その土を前に積み上げたもの。